

修士学位請求論文
要旨

日中韓母語話者における
「許可求め」の対照研究

国際日本学研究科 国際日本学専攻

日本語学・日本語教育学研究領域

4910126001

生駒 美帆

日本語学習者の談話行動を観察すると、文法は間違っていないくとも、場面に適さない、または日本語らしくない表現を使用してしまう学習者は少なくない。

初級の日本語教育では、発音や文法など基本的な部分に焦点を当てるため、語用論的な教育は必要ないとする声もある。しかし日本語でのコミュニケーションにおいて、学習者たちが語用論的な問題に直面することは間々あり、またむしろ語用論的な問題の方が母語話者に不快感を与える可能性が高い。

自分に利益のある行為をする際、またその行為をすることによって相手に少しでも負担や迷惑がかかる場合には、その相手に配慮した発話をしなくてはならない。日本語母語話者であれば少なからず相手に配慮した発話をしているはずだが、学習者は日本語母語話者と同じような、また日本語母語話者が快いと思える発話が実際にできているのかどうかを、この調査で明らかにしたいと考えた。学習者がつまずきやすい点を日本語文法と結び付けることで、より効率的な日本語教育を目指したい。

調査は2013年4月から6月に、日本語母語話者（以下、日）52名、中国語母語話者（以下、中）52名、韓国語母語話者（以下、韓）53名を対象にアンケートを用いて行った。学習者は、中韓とも、8割以上が日本語能力試験N1、N2保持者である。アンケートの内容は、友人、先生それぞれに対し、「暑い教室の窓を開けてよいか聞く」「話し合いの途中で帰ってよいか聞く」、という2つの場面で言うと思うことを、実際に話すとおりに話し言葉で記述するよう指示するものである。相手の立場が同等の場合（友人）と上の場合（先生）とではどのような差異が見られるか、また、相手に対する負担の大きさによってどのような差異が見られるかを検証するため、上記のような場面設定をすることにした。

分析は、①ポライトネス・ストラテジー、②意味公式、③表現形式という3つの観点から行った。

「ポライトネス・ストラテジー」の分析は、ブラウンとレヴィンソン（1987）が提唱した「ポライトネス理論」を参考に行った。聞き手に近づく方向に働く「ポジティブ・ポライトネス・ストラテジー」、聞き手から遠ざかる方向に働く「ネガティブ・ポライトネス・ストラテジー」および「オフ・レコード」のそれぞれの使用された数をもとに計算し、各母語話者がそれぞれの場面においてどれくらいの距離で友人や先生に対し発話しているか、また対友人と対先生との距離の取り方の差を分析した。結果として、日がもっとも対友人、対先生ともに距離が近いことと、韓の対友人、対先生との距離の取り方の差がもっとも大きいことが分かった。中は相手への迷惑や負担の度合いが大きくなるほど、友人に対して遠ざかる傾向がより顕著に表れた。

「意味公式」の分析では、以下の12の意味公式を用いた：①相手の意向の確認、②義務、③宣言、④願望、⑤呼びかけ、⑥詫び、⑦理由、⑧交換条件、⑨今後についての相談、⑩感謝、⑪挨拶、⑫状況の確認。母語話者別に、使用された意味公式の種類、数およびその順序の典型例を見出したところ、「窓を開ける」場面では、対友人：日⑦理由+①相手の意

向の確認、中⑦理由+①相手の意向の確認、韓①相手の意向の確認のみ、対先生：日⑥詫び+⑦理由+①相手の意向の確認、中⑤呼びかけ+⑦理由+①相手の意向の確認、韓⑤呼びかけ+⑦理由+①相手の意向の確認であることが分かった。また「先に帰る」場面では、対友人：日⑥詫び+⑦理由+①相手の意向の確認、中⑥詫び+⑦理由+①相手の意向の確認、韓⑦理由+①相手の意向の確認、対先生：日⑥詫び+⑦理由+①相手の意向の確認、中⑤呼びかけ+⑥詫び+⑦理由+①相手の意向の確認、韓⑤呼びかけ+⑥詫び+⑦理由+①相手の意向の確認が典型例であることが分かった。ここから分かることは、「窓を開ける」「先に帰る」両場面において、韓が友人に対して日、中に比べ意味公式が少なく、対先生との差が大きいことと、「先に帰る」場面において、日が対友人、対先生ともに同じ数、種類の意味公式を使用していたことである。この2点は、ポライトネス・ストラテジーの分析結果（韓は友人と先生との距離の差が大きいこと、日は先生との距離が近いこと）に即していると言える。

意味公式をさらに細かく分析した「表現形式」では、特徴のある表現がいくつか見られた。i.中は相手の意向を確認するために依頼の形を多用すること、ii.韓は義務の形を使用する際に「帰らなければいけません」という言い切りの形を多用すること、iii.中、韓は「先生」と呼びかけることが丁寧とされていること、iv.日は先生に対して宣言の形を中、韓より多用すること、v.中が友人に対しても丁寧体を多用すること、vi.理由→相手の意向の確認という順序における文の接続に関して、て形での接続、「のだ」のない逆接での接続など文法上の誤用である。教科書での指導や、丁寧体という概念の有無、また母語での言い回しなどが日本語での発話に大きく影響していることが分かった。中でも、i、ii、vに関しては、日本語母語話者にとって好ましくないと思われる可能性が高い。

iに関しては、許可求めは行為者が自分、決定権者が相手、受益者が自分なのに対し、依頼は行為者が相手、決定権者が相手、受益者が自分であるといったように、行為者が異なることが分かる。依頼は聞き手に対し、自分に利益のある行為をするよう働きかける発話行為であるため、許可求めよりも相手にかかる負担が大きく、押しつけがましいと思われる可能性が高い。iiの言い回しには、韓国語の「帰らなければならないようです」という表現が影響していると考えられる。自然な日本語に直した結果、このような言い回しになったのだと考えられるが、相手に決定権を与えていない分少々強引とも言える。そのため、日本語母語話者に違和感や不快感を感じさせてしまう恐れがある。vに関しては、日本語母語話者は、友人であればたいいの場合は普通体で話すため、丁寧体での会話は相手との距離を感じてしまう。したがって、日本語母語話者は友人が丁寧体で話しかけてくることに違和感を抱く可能性が高い。

冒頭に提示した「日本語母語話者が快いと思える発話が実際にできているのかどうか」という問題に対しては、上記のような解が結果として現れた。

許可求めの発話行為にどのような差異があるのかを探るため、アンケートを用いて日中

韓の比較をした。学習者（中、韓）に問題が見られただけでなく、日が先生に対し近い距離で接するなど、日本語母語話者として今まで気づくことのなかった意外な発見もあった。

この研究で見られた学習者の陥りやすい問題点を踏まえることで、実際の教室において、より自然な日本語を教えることができると考えている。